明治俳壇と日露戦争

――旧派、秋声会、日本派を中心に

青木亮人

本稿は日露戦時下の旧派や秋声会の手がけた句集を紹介し、日本派が戦争を素通りした事情を考察する事で、埋もれがちな明治俳壇の一端を考察したい。

はじめに

現行の明治俳句史は、江戸以来の俳諧から正岡子規の俳句革新へ筆を進め、日本派（子規一派）の活躍でしめ括られる。日本派に与しなかった俳人は江戸俳諧の残滓として語られる。明治の彼らは広く声望を得たが、今では日本派の偉大さを映す鏡としてのみ語られる。明治俳句史とは日本派の「伝説」なのである。

それが「伝説」である一例として明治俳壇と日露戦争の係わりを考えたい。[1] 両者は没交渉とされるが、それは日本派が戦争に係わる句集等を遺さなかったからだった。当時俳壇で大きな勢力を有していた旧派（月並宗匠と括られた俳人達）や秋声会（尾崎紅葉らの集った結社）[2] は戦時らしい句集を手がけているが、そうした句集は「写生」に沿わないので、語られる事が少ない。[3]

一、旧派俳人と『日露戦争勝鬨集』

五千万一つになりぬ春心　　幹雄

砲弾や勇士の身には春の雨　　準一

我軍艦は列もくづさず春の海　　秋湖

これらは今は「写生」から遠いものと括られるだろう。明治三七年七月刊行『日露戦争勝鬨集』（以下『勝鬨集』と略）から引用した。[4] 編者は「幹雄」、天明の俳人白雄の春秋庵十一世を継いだ三森幹雄の手による句集である。当時の高名な俳人にしてその経歴は明治俳句の独特さと踵を接する明治の代表的俳人である。彼の経歴は

先学に詳しいが改めて紹介し、その独特さと彼の思惑がまじりあい『勝鬨集』へと至る経緯を述べたい。[5]

明治俳句は新政府との結託から始まった。明治五年、教部省は国民教化に僧侶や神官を教導職に任じ、併せて歌舞伎役者や講談師、俳人も任ぜしめ、[6]その結果俳諧教導職に幹雄らがおさまる。[7]彼は明倫講社を設立、機関誌「俳諧新報」「明倫雑誌」を刊行し、次のように俳人を定義し直した。

敬神愛国ノ大道ヲ講シ天理人道ノ大綱ヲ説キ衆人ヲシテ朝旨ヲ遵守セシムルハ我教職ノ義務タリ（略）祖翁今世ニ在サバ此道ノ大教正タラン事何ノ疑フ処カアラン[8]

明治の蕉風は国家神道遵守、国家顕彰、芭蕉の更なる神格化を束ねるものとして奉じられたのである。明治一七年に教導職は廃止になるが、幹雄は明治の蕉風を高めるべく神道俳諧派を結成、同一八年に神道芭蕉派と名を変え、教部省の許可を得る。[9]神道芭蕉派は一万人以上の会員を集め、明治二六年に全国から寄付を募り深川に芭蕉神社を建設、落成も兼ねた芭蕉翁二百年祭を催した。[10]幹雄は明治三一年「都新聞」、同三二年「太陽」で催された俳人人気投票で共に三位を誇っている。[11]子規は「太陽」で二位、「都新聞」で三五位だった。[12]「書生俳諧[13]」の子規は幹雄の声望に未だ及ばない。

明治中期頃の俳句は、当時流行していた点取（懸賞金目当ての投句）俳句のおかげで悪しき遊芸と見なされていた。幹雄は国家を戴く蕉風の司祭として点取俳句に筆誅を加える。[14]だが彼も点取俳句は止めなかった。[15]点取を軽蔑する事で自らの芭蕉への近さを、崇高なものへの帰依を確認する。点取に手を染める自覚なしに、点取への嫌悪は生まれない。自覚と嫌悪が増すほど明治の蕉風に真実味が帯びる。幹雄は憲法発布や両陛下御結婚二五周年といった国事の度に俳句を捧げている。[16]そして帝国膨張の為の戦争は、明治の蕉風を高める好機へ姿を変えるのである。

日清戦時下の「明倫雑誌」は「軍刀の光りするとき霜夜かな」「大砲の遠音ひろがる枯野かな[17]」といった句を載せているが、未だ俳句と戦争の交わりは微温的だった。ところが幹雄は日露戦争でそれを鮮やかに拡大させた。日清戦後より旧派と括られ、非難され始めた彼には、日露戦争は蕉風で新派俳人をも圧倒しうる好機だった。宣戦詔勅後に幹雄選の「時事新報」には「戦争の意味を含みたる[18]」句が募られ、「仁川に沈む露船や春の闇」「海越えて御旗立るや君か春」「新高や不二や皇国の初日影[19]」といった句が「時事新報」「明倫雑誌」に並び始める。かような流れに乗って幹雄は『勝鬨集』を上梓するのである。

平時、風月に情を練り、花鳥に心を鍛へたるの俳士、此時、之を聞き之を見て、争てか、至情を吐露せすして止まんや、（略）

この挙や、彼営利的投機の事業に非ず、実に一意忠情に出るもの[20]

「営利的投機」ではない事で点取俳句と異なる姿勢を示し、内容は戦闘順に句を並べ、日露両国の戦闘の推移を句で復元し、追体験せしめるように構成されている。

日露談破裂
　耳立て待つ初雷のひゞき哉　　幹雄
宣戦詔勅渙発
　待たれしは此鶯の初音かな　　東京　富雄
仁川之巻
　仁川の東風に目立つや日の御旗　　武蔵　群蝶
旅順口之巻
　水雷や波の花咲く旅順口　　能登　素英一
日本海之巻
　にげまどふ浦塩艦や夏の海　　幹雄
我軍雑事
　桐咲くや大本営の軍議会　　駿河　雪嶺[21]

一読して分かるように『勝鬨集』には小見出しに解釈を助けられた、時事に頼った句がほとんどだといえよう。翻って幹雄の句や選句を見れば、彼の蕉風とは誰でも詠みうる凡句に自らの載く蕉風の息吹きを吹き込む営為である事に他ならない。それは例えば次の記事にも現れている。「俳諧の宗匠春秋庵幹雄氏は曩に金百円を恤兵部へ献金せしが尚ほ金二十円を深川区の兵事会へ納めたるよし」[22]。つまり俳句自体からは明治の蕉風は流れ出て来ないのである。

軍国の春にこたへて初鴉　　加賀　碧浪[23]
　秋高し我奉公の時も今　　近江　孤舟[24]
　奉天の入城式や風光る　　石狩　鶯斎[25]

点取俳句を中心に経営していた花の本聴秋主案の雑誌「鴨東新誌」から引用したが、『勝鬨集』の句と違いがあるだろうか。この時期の「鴨東新誌」は「旅順口陥落祝集」「海戦大捷祝集」「奉天戦捷祝集」なる点取句集を催している[26]聴秋の日露戦争は懸賞金の収集以上ではないし、幹雄の日露戦争は蕉風を高める好機以上ではない。広瀬中佐や乃木大将が形作る、日本史の大スペクタクルではなく、微少な、月並の言い回しや戦場を詠んだだけの差異が、移り変わりが、彼らの日露戦争の総体的魂の表現なのである。幹雄は聴秋と根が同じであるゆえに蕉風を護持しなければならない。戦時に合わせて芭蕉の句も次の如くに持ち出される。

紀元二千五百六十五年。第一月一日大吉日を以て。（略）旅順港要塞司令官ステツセル将軍。開城の申込み。（略）
　二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉

と祖翁の高吟を思ひ出して。一座手を挙て万歳を唱ひ。（略）

新年の主山や二百三高地　幹雄[27]

この後幹雄は子規らへの牽制を込め「発句は新派も旧派もなし其時に応じて欲する事を句にするなり六ツかしき事をいふは下手の遁れ詞なり」[28]と締めくくるが、確かに日露戦争は新派も点取俳句も一跨ぎにこえる好機だったのである。明治三七年三月に旅順口閉鎖作戦で戦死した広瀬中佐を和歌、漢詩、俳句でもって賞賛した『広瀬中佐忠烈表彰歌詩俳句集[29]』なるアンソロジーが同年一一月に出版されたが、俳句欄筆頭には幹雄が選ばれている。

仰ぎ見ぬ者なかりけり子規　三森幹雄

吹き寄せよ神のやどりしうつせ貝　竹冷角田真平

芳しき花と散りけり肉一片　松宇伊藤半次郎

義に軽き命や花の一雫　無黄森貞二郎

白牡丹みづくかばねと散りにけり　戸川残花[30]

幹雄は明治の蕉風の司祭として広く認められていた事が窺える。かような明治の蕉風は、明治三八年の旅順陥落後の祝賀会でそれは直裁に示されている。

蕉風明倫教会新年祭併旅順陥落祝捷会

一月十五日本院にて開会（略）午後二時より祭典執行順次俳諧正式奉吟及祝捷会祝吟朗読式全く終るや皇国万歳天皇陛下万歳陸海軍万歳蕉風明倫会万歳を各三唱して退場し夫より祝捷の宴会を開き午後八時与蘭にて散会せり

一斎主　大教正　春秋庵幹雄

一祓主兼大麻　権少教正　鈴風舎文彦

（略）

棒吟　各略詞書

鶯も勝鬨なれや声高し　七十七翁　幹雄[31]

国政を祝し、神道に則り芭蕉を崇める幹雄の蕉風は明治俳句の独特さであり、日露戦時下に『勝鬨集』となって結晶したといえよう。現行の俳句史は日本派がかような蕉風に抗して蕪村等を発見した経緯を、そして抗されるだけの力を幹雄ら旧派が持っていた機微を、見逃しがちではないだろうか。

『広瀬中佐忠烈表彰歌詩俳集』に戻りたい。幹雄句の隣の「竹冷角田真平」は子規らに与しなかった新派の領袖にして結社「秋声会」の主催者、市会議員から衆議院議員を務めた名士であった。秋声会は戦時下に大規模な懸賞俳句集を手がけている。

二、秋声会と「明治俳句風流陣」

明治三七年に創刊十周年を迎えた「文芸倶楽部」は、同年一二月号に「五百円の俳句[32]」なる懸賞俳句の催しを発表した。五百円の懸

賞金を一三三名にあて、佳句は定期増刊号に一斉発表、規定は戦時に合わせて「夏季に武器の名読込[33]」む句とした。明治三八年一月号より投句用紙を挾んで投句を募り、毎号宣伝を重ね、結果九七七五三句が寄せられる。明治三八年四月、定期増刊号は「文芸倶楽部定期増刊　明治俳句風流陣」（以下「明治俳句風流陣」と略）と銘打って出版された[34]。

薫風や黄金作りの太刀佩きて　鼓舞子（第一等、賞金二百円）
夕顔や君が黄金の太刀細き　　嵐川　（第二等、賞金百円）[35]

一位、二位共に戦地情緒を瀟洒に詠む句が獲得した。選者は伊藤松宇、角田竹冷、其角堂機一、岡野知十、大野洒竹、雪中庵雀志、内藤鳴雪、三森幹雄の八名、彼らは「文芸倶楽部」懸賞俳句欄の選者にして鳴雪の他はほぼ秋声会会員である。非売品の『勝鬨集』とは正反対の懸賞俳句集、しかも『勝鬨集』と異なる句の集められた「明治俳句風流陣」は、秋声会の戦時の代表的句集といえる。以下、秋声会の俳句への姿勢がこの懸賞俳句集を成り立たせしめた経緯を述べたい[36]。

秋声会は明治二九年に結成される。角田竹冷の肝入りで尾崎紅葉、巌谷小波、戸川残花、伊藤松宇、大野洒竹、岡野知十らが名を連ね、日本派以外の新派俳人に及んだ結社である。「世に云ふ門派の異同は問ふ所にあらず（略）真の風雅を振ひ興さん事を期するものなり故に妄りに毛嫌ひするを許さず[37]」と謳った秋声会は、「テン〳〵勝手な句を吐きちらして、一場の興趣を喜んだ[38]」集いでもあった。竹冷は風流の交わりを愉しむため、主義や方針を掲げる事をしなかったからである。

夜桜の鐘聴得たり寒山寺　　紅葉[39]

紅葉が日記に遺した句だが、春の東京の寒山寺を訪れた情景に張継の七言絶句（姑蘇城外寒山寺／夜半鐘声至客船）を重ねる感覚は、洗練された趣味性が座興に花を添えるあでやかさを好む秋声会の姿勢をよく伝えている。竹冷が日本派を「自然を愛し細工を許さず而して往々平凡に了る是近時の達人の作句なり[40]」と揶揄する句作の姿勢である。日露戦時下にもこの会の好みは変わらず、「明治俳句風流陣」の「蛍飛ぶや横たふ剣の枕上」「絶頂に佩刀の将や風薫る」「砲台に薔薇活けたる天幕かな[41]」といった選句はそうした姿勢による。秋声会選の「文芸倶楽部」は日露戦争の経過と共に戦時の色濃くなるが、同時に香気と嗜みに満ちている。

征衣余滴

紅梅の色艶麗や雲の花　　軍艦和泉　逸水
紅梅や内侍一人立つ院の庭　　軍艦高雄　菰淵[42]

秋声会会員には政治家や弁護士といった社会的名士が多かった。[43]名士は良識に従い戦争気分を穏やかに盛り込む嗜みを示さねばなるま

い。ゆえに軍人の俳句も洒脱な句が選ばれる。前章の『広瀬中佐忠烈表彰歌詩俳句集』の「松宇伊藤半次郎」「無黄森貞二郎」「戸川残花」は秋声会の主要会員である。彼らのように良識の範囲に戦争を消化しうる名士の嗜みが、「武器の名読込」む句を集めながらも戦地の殺伐さを盛るだけの句を採らない「明治俳句風流陣」の香気、あるいは気概を形成している。この嗜みは「明治俳句風流陣」と『勝鬨集』の隔たりでもある。

洒脱な趣味人であれば俳席を共にした秋声会の姿勢もこの香気を醸成したと思われる。明治三四年の紅葉の日記には老鼠堂永機、雪中庵雀志、其角堂機一の列席が記されるが[14]、永機は旧派の大物にして北村透谷に粋人ぶりを記された俳人であり、雀志、機一も高名な旧派俳人だった（彼らは後に「明治俳句風流陣」の選者になる）[15]。秋声会とはつまりは粋人の社交のサロンであり、それは日本派と異なる階級人士の集いなのであり、「明治俳句風流陣」の集句数の多さはその証左であろう。

名士の集いの秋声会は新聞俳句欄選者も多く任された。「俳声」には当時の俳句欄担当者一覧が載るが[16]、日本派は二紙、秋声会系は五紙である。彼らの名声が利用されての事であるが、購読者にはそれが大事だった。秋声会の係わった五紙でも「読売新聞」は数度の懸賞俳句で読者を魅了している。選者に紅葉、竹冷、永機、幹雄を起用し、明治三四年六月（総額一一〇円、集句数八七五〇九）、九月（総額二三六円、集句数五四六八七）、翌三五年一月（総額七五円、集句数七八六五七）と三度催し、多額の懸賞金の下に入選句を連日披露している[17]。「読売新聞」の成功と「文芸倶楽部」懸賞俳句欄とそれを支える秋声会の人脈、「文芸倶楽部」十周年記念の企画を合わせると、「明治俳句風流陣」の相貌が形成される。

「書生俳諧[18]」の日本派はこの懸賞俳句集を受け入れなかったが[19]、しかし秋声会は懸賞俳句を愉しんだのである。「臨川夢人嘗て予の閲句の状を見て是ビヂネス也詞人の為すべきにあらずと諫めし事あるを憶記せり。洵にビヂネスなる哉然れど予は半面ビヂネスを喜ぶもの又之が為に労するを覚えざる也[20]」。この紅葉の日記には本業で名を博す粋人が世間を対手に悠々と余技に浸っている、そうした闊達さに溢れてはいないだろうか。高山樗牛に「読売新聞は（略）懸賞俳句を募り、紅葉の名は常に選者の中にあり。爾来彼を呼ぶに早く宗匠を以てすべき也[21]」と嘆かしめる俳句熱は、しかし秋声会の姿勢を示すのである。「明治俳句風流陣」末尾には「紅葉山人句集拾遺」が付され、紅葉没後に出版された『紅葉山人句集[22]』の遺漏が補われているが、かような句集に紅葉の遺漏句を付した事自体、秋声会の大らかさをよく示している。

秋声会の華やいだ句調の好みと戦時下の国民情緒の良識ある嗜み、

そして懸賞俳句との近しさを愉しむ秋声会は、日本派と異なる階級人士が同じ時期に俳句に携わっていた事を示す。「明治俳句風流陣」はその見事な現れである。昭和の俳句雑誌「風流陣[53]」にも連なる「明治俳句風流陣」の持ちえた香気は、しかし俳句史では評価が低い。日本派の佐藤紅緑が「秋声会では道楽半分にやつて居るので、私共は芸術として生命を打ち込んで研究して居るのです、彼等は骨董屋で私共は創作家です[54]」と非難したような、今では金銭と切り離された句作者のイメージがもてはやされるからである。岡野知十は秋声会を「閑俳」、日本派を「専俳」と評したが[55]、「芸術として生命を打ち込」むのではない「閑俳」は、明治俳壇の美質ではないだろうか。

『紅葉山人句集』に戻りたい。

この句集は瀬川疎山なる俳人の手で帝都社より出版されている。疎山は秋声会の雑誌「卯杖」等に見える俳人だが、彼は明治三八年七月、帝都社より『戦争俳句』という句集を出版している[56]。

日本派がこの句集を非難した。

三、日本派と『戦争俳句』

日本派は戦時に沿った主だつ句集や俳句を遺していない。例えば広瀬少佐（後に中佐）の戦死を報じた日の「日本」（碧梧桐選）「国民新聞」（虚子選）は主に次の選句である。

陽炎や石垣長き港口　　未央
陽炎や埃静まる馬の市　　河鷗
陽炎や温泉に近き磯伝ひ　　碧梧桐（『日本』[57]）
陽炎や磯の小貝の溜り水　　たらい
陽炎に踏切番の旗赤し　　欽宇
陽炎や盥につけし濯物　　伯洲（『国民新聞』[58]）

幹雄が広瀬少佐を「旅順口閉塞　同決死隊　春へ出る口なくなりぬ旅順口[59]」と詠む姿勢と異なっているのが如実である。虚子は次のように語っている。「戦時に在つても俳人は天然人事の美を十七字に詠じて安心立命の地として居る。（略）俳人の目にうつる山水は悉く美で悉く有趣味で悉く耳目を楽しませるに足る[60]」。かような虚子らの「天然人事の美」の道を開いたのは子規の「写生」であると考えられる。坪内稔典は「写生」を次のように解説している。

病体なのに戦争の進行に手を拱いておらねばならないという焦燥が子規に煩悶をもたらしたのだ。その「煩悶の極」にある子規の生の位相は、彼が一体感を持ち続けた明治の日本からのずれであった。子規はその位相において自らの俳句の核をつかんだのであった[61]。

日清戦時の「日本」では、例えば友人の五百木瓢亭が「従軍記」を

連載、俳句を交えた軍役日記を載せている[62]。知己が戦地より送りつける文を見て胸中に野心を秘める子規が煩悶に覆われた事は想像に難くない。子規は結局周囲の反対を押しきり日本を発つが、戦地到着前に日清戦争は終結し、病身をおしての渡航が重病人へと追いやり、彼は少ない余生を俳句革新に費やす決断を下さざるを得なくなった[63]。その時に胸中に広がったのが、「美」に彩られた天然の情景だったのである。

赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり　　子規[64]

子規の「写生」とは明治国家への参画の失敗と無力感とに裏打ちされた陰影の濃いまなざし、「むしろ極端に自虐した病者の感傷の変貌した現れ[65]」である。それは「天然人事」の神秘化、つまりは野心の挫折に裏打ちされた日常的現実の改変手段の総合体系としてのカタルシス＝「美」を得る道を開かねばならなかった事を意味し、そこにこそ子規の切実な自意識の緊張があった。そこから初めて俳句は「美の感情[66]」であると宣言した事に留意せねばなるまい。だがそれは子規の事情であるから、彼の死後に「写生」の「美」が独り歩きするのは必然だった。内藤鳴雪は日露戦時下にこう語っている。

一体私共の研究して居る俳句、これは一から十まで「美」を根底として居るので、この「美」を唄ふ俳句が戦争によつて変化のあるべき筈はない。（略）自然の美を唄ふものを詩とすれば、

其の内容に戦争が影響を及ぼす筈がないではありませぬか[67]。

鳴雪はさらに、「月並調、即ち旧派俳句と云ふものがありまして、（略）この輩の俳句は由来「美」を唄ふと云ふよりも、寧ろ道徳の感念を主として貴んだものがあるので、「美」に代ふるに「善」を以てしたもので、（略）即ち文学から云へば、全く別根底のもの[68]」と述べる。幹雄の国家祝句や秋声会の戦争情緒は日本派に関係がなくなる。それは「写生」の「美」のおかげなのである。

その一例に、日本派系雑誌「鵜川」と前掲『戦争俳句』のやりとりを紹介したい。『戦争俳句』は題書に巌谷小波の揮毫「軍国の勝つた勝つたと鳴く蛙」が掲げられ、疎山や帝都社は秋声会に縁がある事から、秋声会系の人脈によってなされた句集と思われる。

僕が今日此『戦争俳句』を編むに至つた動機は、（略）閑文字を弄すると誹られつゝあつた俳人が、（略）是丈けの熱誠を以て、縦し間接とはいひ乍ら、文学の上に報国の情を披瀝して居るではないかといふ事を世間に知らせようとした[69]

この序言に「鵜川」が反応した。「戦争があつても平気で月や花の句ばかり作つて居つても、其句によいものさへ出来ればこの方が寧ろいくらも『文学の上に報国の情を披瀝』して居るものかも知れない[70]」。「鵜川」は続けて『戦争俳句』の杜撰さを難じるが、何より句の月並こそ看過しえない事態だと指摘する。

戦時の出来事を其儘詠むといふても、剣戟相交る戦闘場裡を離れて、（略）俳句の一種の美化手段として、鉄砲の音を初雷にたとへたり、人の死んだのを花の散つたのにたとへたりして、恐ろしいむごたらしい事柄でも、夫れ程でなく美しい景物の裏に意味だけを含ませた作法が用いられる。（略）戦争といへば直ちに血汐だの屍だのと騒ぐのは、幼稚極まると評する外にない。（略）而かも過半が月並臭いのは何故であるか[71]。

子規の語った「写生」の「美」がここで書き換えられる。無窮大の野心を持つ自分がなぜ赤蜻蛉を「写生」するのか、その子規の切実な自意識に支えられた緊張が、認識が、ここでは戦地の美化として、月並調から逃れる一技術としてのみ語られる。疎山は「鵜川」に論駁するが、そこで彼は、日本派は戦争を詠む俳句が月並か否かにのみ関心を寄せている事を図らずも暴いている。

戦争俳句は際物だ、際物は月並だ、ソレを掲載する雑誌は月並的に武装して居るのだ、ソレから見ると、武装しない我々の雑誌こそ豪いものだらう、とオツに豪がられた先生があつたが、時流に鑑みるの識なき事と証明する[72]

日本派は月並を怖れ、戦争は素通りされ、「写生」の技術だけが問題になる。日本派は「写生」に支えられ、俳句と戦争を切り離し、天然人事を構築し続けたのである。明治初の総力戦である日露戦争で、日本派は眼前の戦時情景を、その殺伐さやあられもない理不尽な暴力といった、確かに看過できるはずもない唯物的条件を、憎むものと教えて、より短絡した「美」の救済の道を門人らに教えたばかりでなく、より本質的には、「写生」の早産的な確立を、強いる力量はなかったとしてもその足場の指図をなし遂げたのである。

海を渡つて王師に参る春の風　　碧梧桐[73]

それは子規の「写生」の極端な継承でもある。現行の俳句史とは、その指図に従って造られた「写生」の風景に他ならない。

おわりに

現行の「写生」とは、子規亡き後の日本派の「美」の技術に支えられた「天然人事」の風景である。だが「写生」の外にも多くの明治の俳人がおり、進化論的に日本派の前や後ではなく、同じ明治に生き、同じ俳壇を形成していたのである。一口に近代俳句といい、子規が、虚子、碧梧桐が、近代の重い扉を開けたという。誰もが子規を語るのは、俳句が師匠から弟子へと至る血脈を特に重んずるジャンルだからでもあるが、しかしそれと明治俳壇の資料が垣間見せる現実は、別である。

明治俳壇と日露戦争という視野は、埋もれた明治の多くの俳人の存在に、あるいは俳壇の様々な潮流の中で子規らの「写生」がなぜ

にこれほど伝播したのかに意識的である事を促す。日露戦争を含む俳句史観の発想は、明治俳壇の様々な神話と現実を照らすといえよう。

注

① 松井利彦『近代俳論史』（桜楓社、昭50・8・25）等を参照。現行の俳句史に日露戦争を盛り込む史観は管見では見当たらない。

② 新派、旧派、日本派、秋声会派の命名は岡野知十。「秋声会論（上）」（「俳声」1-5（明34・6・20）、13～17頁）等を参照。

③ 旧派の句集の先行研究は管見に見当たらないが、秋声会の句集は村山古郷「『文芸倶楽部』の懸賞俳句」（『明治大正俳句史話』所収、角川書店、昭57・4・15、247～249頁）で紹介されている。

④ 『日露戦争勝関集』発行人三森準一（幹雄の養子、論者注）、古池吟社、明34・7・21。俳句は右句から1、9、57頁。

⑤ 関根林吉「三森幹雄評伝（一）～（八）」「俳句」27-4（昭53・4・1）～27-11（昭53・11・1）等を参照。

⑥ 『明治官制辞典』（朝倉治彦編、東京出版、昭44・4・10）「教導職」項参照。

⑦ 俳諧教導職の顚末は勝峯晋風『明治俳諧史話』（日本図書センター、近代作家研究叢書45、昭59・9・25）に詳しい。

⑧ 東杵庵月彦「祝詞」「明倫雑誌」1（明23・12・25）、1頁。

⑨ 教導職廃止は前掲『明治官制辞典』参照。神道俳諧派設立は「明倫雑誌」34（明17・10・15）の「神道俳諧派開設之説」（30～31頁）等を参照。神道芭蕉派の認可は「明倫雑誌」55（明18・4・20）等を参照。

⑩ 「明倫雑誌」147（明26・10・30）。144（明25・5・31）～155（明26・12・25）辺りには全国規模の蕉風明倫講社会員による寄金が掲載され、幹雄の影響力が窺える。二百年祭は（明26・12・30）の「二百年祭記事」（25～32頁）等を参照。

⑪ 「俳諧十傑投票」「都新聞」明31・3・1、「明治十二傑投票（俳仙十二傑）」「太陽」5-11（明32・5・5）、270～271頁。

⑫ 同右参照。

⑬ 新松子「謾言其四　新派と旧派」「明倫雑誌」163（明29・5・25）、3頁。

⑭ 幹雄は「俳諧矯風雑誌」（創刊号未見、2号は明22・8・20）を発刊するなどして点取俳句の弊を述べている。

⑮ 「明倫雑誌」広告欄には月次点取俳句募集が頻繁に掲載されている。

⑯ 憲法発布祝句は「明倫雑誌」94（明22・2・25、3頁）に、両陛下御結婚二五周年祝句は『奉祝俳句集』（出版社不明、明27・3・5）に発表されている。

⑰ 「明倫雑誌」155（明27・12・25）、31頁。

⑱ 「時事新報」明37・3・9。

⑲ 同右参照。

⑳ 前掲「勝関集」、序文。

㉑ 前掲「勝関集」、4～33頁。

㉒ 「時事新報」明37・3・7。この献金は「何と見上げたものでは無いか、新派の先生達顔色なしであらう」（城北閑人「隣の噂」「卯杖」2-3、明37・3・25、28頁）と新派俳人を瞠目せしめた。

㉓ 「鴨東新誌」257（明37・12・30）、14頁。

㉔ 「鴨東新誌」261（明38・4・30）、「旅順陥落祝集成績」欄。

㉕ 「鴨東新誌」266（明38・9・30）、2頁。

㉖ 例えば明38・3の奉天会戦に因んだ「奉天戦捷祝集」は「鴨東新誌」

262（明38・5・30）広告に載り、6・20締切、開巻は266（前掲、9・30）。かようなペースで日露両国の戦闘、外交に因んだ点取俳句集が誌上で開かれている。このような点取句集は当時膨大にあったと思われる。

㉗ 無署名（幹雄）「社説」「明倫雑誌」249（明38・1・20）、2頁。

㉘ 同右、4頁。

㉙ 『広瀬中佐忠烈表彰詩歌俳集』読売新聞編集局、読売新聞日就社、明37・11・15。

㉚ 同右書、176頁。

㉛ 無署名「蕉風明倫教会新年祭併旅順陥落祝捷会」前掲「明倫雑誌」249、29頁。

㉜ 「文芸倶楽部」10-16（明37・12・1）、広告欄1頁。

㉝ 「文芸倶楽部」11-1、（明35・1・1）広告欄参照。

㉞ 「文芸倶楽部定期増刊　明治俳句風流陣」「文芸倶楽部」11-6（明38・4・15）。投句数は目次欄参照。

㉟ 同右、292、294頁。

㊱ 秋声会の経歴は前掲『明治大正俳句史話』に詳しい。

㊲ 竹冷「聴雨窓漫話」『秋の声』1（明29・11・5）、15頁。

㊳ 前掲「秋声会論（上）」、15頁。

㊴ 尾崎紅葉「十千万堂日録」明34・4・8項、『紅葉全集』11巻（岩波書店、平7・1・26）、179頁。野山嘉正「『十千万堂日録』漫読」（『紅葉全集』月報9、岩波書店、平6・9、1～5頁）に紅葉が実際に赴いた東京の寒山寺の所在に関する指摘がある。

㊵ 前掲「聴雨窓漫話」、15頁。

㊶ 前掲「明治俳句風流陣」、上句から17、98、99頁。

㊷ 「文芸倶楽部」11-3（明38・2・1）、304頁。

㊸ 無署名「秋声会員の職業」「秋の声」2（明29・12・5）、23頁。

㊹ 前掲「十千万堂日録」明34・4・7項、178頁。

㊺ 永機は前掲（⑪）の人気投票で共に一位。雀志、機一も名を連ねる。北村透谷は「秋窓雑記」（「白表女学雑誌」330、明25・10・22、確認は『透谷全集』勝本清一郎編、岩波書店、昭49・7・10、45～50頁）に永機の粋人ぶりを記している。また「明倫雑誌」162（明29・3・31）等に秋声会の記事が散見され、幹雄とも近かった事が窺える。

㊻ 局外生「新聞俳壇略評」「俳声」1-2（明34・3・20）、51～54頁。

㊼ 一回目は明34・8・6～同年9・11に下位、同年9・18に上位披露。二回目は明34・10・16～12・4に下位、同年12・16に上位披露。三回目は明35・1・20～2・28に下位、3・13に上位披露。

㊽ 十千万（尾崎紅葉）「紫吟社月並句選」「読売新聞」明28・12・9。

㊾ 城南隠士「俳諧空談」（「俳声」1-5、明34・11・20）に「親分が定めたる「大要」（子規の「俳諧大要」、引用者注）の趣旨を守つて二百円に眼をくれぬは、流石に見上げたものである、夫れとも変名で出て居るかシラ？」（15頁）と揶揄されている。

㊿ 前掲「十千万堂日録」明34・10・6項、229頁。

51 高山林太郎「明治三四年の文学界」「太陽」8-1（明38・1・5）、16頁。

52 『紅葉山人俳句集』瀬川嘉助（疎山）編、一二三館、明37・6・5。

53 俳句雑誌「風流陣」は西村将洋「神奈川近代文学館所蔵　俳句雑誌『風流陣』総目次――HAIKAI DU JAPONの軌跡――」「同志社国文学」59（平15・12・25、21～87頁）に詳しい。

54 佐藤紅緑「子規先生」「中央公論」22-9（明治40・9・1）、55頁。

55 前掲②参照。

56 瀬川疎山編『戦争俳句』、帝都社、明治37・5・7。

57 「日本」明37・3・24。

58 「国民新聞」明37・4・1。
59 「時事新報」明37・3・9。
60 高浜虚子「俳話（三）」「ホトトギス」7-8（明37・5・10）、11頁。
61 坪内稔典『正岡子規　俳句の出立』（俳句研究社、昭51・4・1）97頁。
62 犬骨坊（五百木瓢亭）「従軍記」「日本」明27・8・29～明28・8・2に連載。
63 子規従軍の経緯は、「陣中日記」「日本」明28・4・28～同年7・23等に詳しい。
64 「日本」明27・10・27。
65 保田与重郎「正岡子規について」（『保田与重郎文庫』1、新学社、平11・4・8）18頁。
66 正岡子規「俳諧大要第二　俳句と他の文学」「日本」明28・10・24。
67 内藤鳴雪「文士の戦争観其六　内藤鳴雪氏（戦争と俳句）」「文芸倶楽部」10-16（明37・12・1）、224頁。
68 同右、225頁。
69 瀬川疎山「序言」前掲『戦争俳句』、1～2頁。
70 闇玉庵「ヤミ汁」「鵜川」2-3（明37・8・7）、31頁。
71 同右、35～39頁。
72 疎山「忙言閑語」「卯杖」2-5（明37・5・25）、26頁。
73 「日本」明37・3・21。